

## 「霞ヶ浦導水事業の検証に係る検討報告書（素案）」に対する関係住民の意見聴取

平成 26 年 3 月 3 日（月）13:00～13:20

常陸河川国道事務所 1 F 地域支援室（C）

発言者：意見発表者 3

私は、今日、栃木的那須的那珂川源流近くの大田原という所から来ました。小さい頃は、那珂川の支流の武茂川、八溝山系にあるんですけども、近くに久慈川というのがあるんですけども、そこで小さい頃、武茂川という川遊びをしました。よく川ガキという言葉がありますが、私は夏休みの日は夜明け前の 5 時頃から夕方の 4 時、5 時頃まで、食事のとき以外はずっと川で生活していました。それくらいやっぱり川が楽しかったんです。やはり今日こうやって皆さんにお話しできるのもやはり小さいときの思い出があったと思います。今回、私がわざわざ栃木の大田原から 2 時間かけて車で来たわけですけども、ひとつ大事なテーマなんですけれども自然の川の流れて欲しいということです。あとポイントはふたつ。今回、霞ヶ浦導水事業に関してふたつです。ひとつはですね、霞ヶ浦導水事業の目的である、霞ヶ浦の浄化の問題です。それがひとつ。もうひとつは那珂川の自然の流れをそのまま守って欲しいということ。この 2 点についてお話ししたいと思います。まず、霞ヶ浦の浄化を目的とした霞ヶ浦導水事業なんですけども、もともと霞ヶ浦というのは汽水湖であって、それを鹿島臨海工業地帯の水瓶として、または洪水による治水、塩害防止のために 1963 年に逆水門を作ったんです。そのことによって富栄養化という現象が始まりました。自然な水の流れがなくなったということなんです。水というのは、多少自然の中で浄化する作用があるんですけども、逆水門を作って、水の流れを止めたことによって富栄養化というのが起こったわけです。富栄養化というのが霞ヶ浦の汚染の原因だとすれば、その浄化をするためには、自然の流れを取り戻すためにやはり逆水門を開けるのが一番いい方法ではないかと思うんです。次に 2 番目です。那珂川の自然の流れを守って欲しいということなんですけれども。霞ヶ浦の取水が稼働した場合に、那珂川には水のやりとりをするので、水が流れてくるわけなんですけども、もともと、那珂川というのは源流から水戸まで 150 km、その中ではアユ、それからサケが遡上してくるわけなんです。その遡上するには水質がありまして、貧栄養化という水質が必要なわけです。この貧栄養化なんですけれども、実はこれ、貧栄養化の水なんです。昨日、那珂川の源流付近から採ってきた水なんです。ちょっと見ていただくと分かると思うんですけども、かなり透明度が高いわけなんです。この水が保たれていることによって、那珂川のアユ、それからサケ、それから支流に掛けてはイワナ、ヤマメとかが成長することができるわけなんです。霞ヶ浦導水事業が完成して、取水が稼働した場合に、ここにこれまで存在していなかった微生物や外来魚が那珂川に入ってくる可能性があるわけなんです。一体、何を担保にして那珂川の生態系の維持を保證できるのか、誰もここにいる方は答えられないと思うんです。確かに机の上ではデータをもって、こうだと言えらるかもしれませんが、ただし、1 回稼働した場合に那珂川の汚染が始まった場合に、それを止めることは誰にもできないと思うんです。そういうリスクを負ってまでこの事業をする必要はないんじゃないかと住民の視線からは考えるわけです。霞ヶ浦は富栄養化ということで、逆水門を開けるのが一番いい方法だと思うんです。那珂川は那珂川で、その自然の流れを保持するのが一番いい方法だと思うんです。ここにいる中の全員とは言いませんけれども、ほとんどの人がこの事業が本当に必要なのかと疑問に思っている人もいると思うんです。本当は必要ないんじゃないかなと。でも、それを止めることができないのは、何かほかの理由があるんだと思うんです。既得権益とか、そういった問題が必ずあると思います。そういった問題をクリアする

のは大変な問題だとは思いますが、やはり、必要ない工事をするべきではないと思います。すでに1,400億円予算を使って、すでに30年経ったわけなんです。着工から30年経ったわけなんですけれども、それでまだ3分の1のトンネルしかできていないということなんです。1年に換算すると46億円掛かっているわけなんです。そのお金、一体どこに行ってしまったんでしょうかということなんです。一般の企業で言えばすでに破綻している状態だと思うんです。住民の目線で言えば、やはり霞ヶ浦導水事業というのは、破綻したプロジェクトというふうになってしまうと思うんです。稼働しても新たな汚染を発生するおそれがある。そこまでやっていくのが本当にいいことなのかというのは、後世になってからでないと分からないというふうに考える方もいらっしゃるんじゃないかと思うんですけれども、高度成長期が終わって当初の公共事業の目的を失い、政治も混迷している中でやっぱり私たち住民は、このような大きな公共事業よりは、地域の美しい自然を残していく。そういう持続可能な社会を望んでいるというふうに考えるのが常識的な市民の考え方だと思います。最後に言いたいことは、霞ヶ浦は逆水門を開けて浄化に努めて欲しいということです。那珂川に関しては、自然な川の流れを守って欲しいという、この2点です。以上ですが時間があるので、ちょっとお話ししてよろしいでしょうか。自然環境という部分なんですけれども、こういうお役所の方だと色々大変だと思うんですけれども、私の母の叔父が北海道の林野庁に戦後、勤めていました。その叔父は大学で林学科というのを専攻していましたので林野庁に入って、その頃、山に杉を植えるというのが流行った時期があったのです。国家政策として私の母の叔父は、これをやったら自然環境が駄目ということになったということで反対したわけだったのです。そうしますと中央官庁からすごい圧力がきたんです。結局、叔父は所長をやりましたが北海道を転々とするようになってしまったわけなんです。やはりその国家政策というのは、個人の方では、どうにもできないという部分もあると思うんですけれども、やはり間違っていることは必ずあるんです。それをやはり見極めた上で新しい革新的な事業を興していかないと、今後、日本の経済も社会もだめになってしまうと思うんです。その話を私は母から聞いたんですけれども、その飛ばされた叔父は、戦後、私のおじいさんと私の母がいろいろ話していて、自分は正しいことをやっているのになぜ理解してくれなくて、飛ばされるんだと悔しかったという話を聞いたんです。それで私のおじいちゃんは、ブナやカエデの木をその当時の倶知安という営林署に送って、おじいさんは木を植えたそうなんです。やはり私たちも、それから整備局の方も反対している中、声を上げにくいとは思いますが、やはり、少し世の中を変えて行こうというふうな、動きをしていきたいなと思います。